ヨーロッパ日本研究者会議に参加して

金子幸代

デンマークのコペンハーゲン大学で一九九四年八月二二日から二六日にかけて開催された第七回ヨーロッパ日本研究者会議（EAJS）に参加したので、今回はその会議について書いてみたい。

ヨーロッパ日本研究者会議は、三年に一度の割合で開催されている。前回、一九九一年に開かれたベルリン大会には、東西ドイツを分かつ壁が取り壊された直後ということもあって、八百名もの研究者や学生が集まった。コペンハーゲンでの開催は、ベルリンほどではないものの、参加者は約五百名という大規模な国際会議だった。

ヨーロッパの日本学研究者を中心に、アメリカ、カナダ、ブラジルなどからの参加もあり、ヨーロッパ日本研究者会議の裾野の広がりが感じられた。研究発表のセクションは、文学、社会学、歴史、言語学、思想史、民俗学、映像、経済、建築などに分かれており、多角的な角度から日本についての研究発表が行われていた。

私は、文学部門の「近代日本文学におけるジェンダー」のシンポジウムのパネラーになり、鷗外文学における女性像についての発表を行った。シンポジウムのパネラーは、日本から参加した私の他、イギリス、ノルウェー、カナダ、ドイツの研究者だった。森鷗外の他に夏目漱石や川端康成、河野多恵子などの作品が取り上げられた。五人のパネラーの内、漱石について発表したロンドン大学のドット・ステファン氏以外は、河野多恵子について発表したトロント大学のリビア・モネさんをはじめ、女性研究者である。司会はケンブリッジ大学のマックス・モーリス氏とブルガリア人女性で現在日本で研究を続けているツベタナ・クリスティバさんという組み合わせで、会議の運営の一翼を担い活躍している女性の姿が目立った。参加した研究者の半数以上は女性で占められていた。

研究発表では総じて、書かれた時代の社会状況に絡ませて作品を解明していく方法と、記号論的な視点から作品を切り取って行く方法という二つのアプローチが見られた。

今回の私の発表は、前者に属し、鷗外が生きた時代から作品を読み解いていこうとするものだった。佐藤春夫は「森鷗外のロマンチシズム」の中で「鷗外の留学をもって近代文学の起源としたい」と述べているが、一八八

四年から一八八八年にわたる鷗外のドイツ留学は、後年の旺盛な文学活動に大きな影響を与えている。とりわけ留学中、ドイツの女性解放運動の先駆者ルイーゼ・オットー＝ペータースが主宰する「ドイツ婦人会」総集会に鷗外が出席していたことは看過できない。

鷗外は、一八八五年九月二八日、二九日の二日間にわたり「ドイツ婦人会」総集会を聴講した。出席者百人あまりの内、男性の聴講者はわずか十数人であった。鷗外はその数少ない男性聴講者の一人であり、しかも男性の聴講が許された二日間とも出席している。集会において、ドイツの女性たちが地位向上に向けて積極的に話し合う真摯な姿に接し、鷗外の女性観は広がりのあるものとなっていく。

留学時代の女性解放運動家との出会いは、帰国後、日本における最初の女性による団体「青鞜」などの女性解放運動を応援する契機ともなった。鷗外は、清水紫琴、樋口一葉、与謝野晶子らの文学の才を称えて早くから注目していたが、平塚らいてふについても高く評価している。

また、「青鞜」の一員だった尾竹紅吉が「青鞜」を辞め、「番紅花」を創刊することになると、紅吉の頼みに応じ、鷗外は創刊号の巻頭に随筆「サフラン」を執筆した。その上、ほぼ毎号「海外通信」を寄稿し、海外の女性解放運動や女性問題を紹介し、啓蒙的な役割を果たしており、鷗外の女性雑誌への並々ならぬ肩入れを見ることができる。他方、このような「新しい女たち」との交流は、鷗外自身の創作にも反映し、自らの意志によって決断し、道を切り拓いていく女性を主人公とする歴史小説や史伝を次々に執筆している。

発表では、ドイツにおける女性解放の先駆者であるルイーゼ・オットー＝ペータースはドイツ人にもあまり知られておらず、反響が大きかった。また、鷗外が随筆や「海外通信」を寄稿した尾竹紅吉の「番紅花」についても関心を呼んだ。

時間の関係で発表者相互の討論の時間がほとんどとれなかったのは残念だったが、フロアからは他の発表者に対しても活発な質問や意見がでた。たとえば、漱石の『こころ』について、「奥さん不在」の「同性愛」とも受け取れるような先生と私との密接なつながりは、歌舞伎に見られる女形の伝統の中から読み解けるのではないのかという具体的な指摘があった。近代文学は明治維新からと近世と区分して考えがちであるが、江戸時代からの地続きで明治の文学作品をとらえることの必要性を教えられた。

また、『雪国』の女性像には川端の女性に対する憧れと恐れ・憎悪といったアンビバレントな思考が反映されているのではないかという指摘や、河野多恵子の『ミイラ採り猟奇譚』で描かれる男性のマゾヒズムは、女性の性を相対化するための装置となっているのではないかといった指摘など、いずれも個別の作家の問題にとどまらず近代日本文学におけるジェンダーを考える上での貴重な指摘といえよう。

今回は、ヨーロッパの近現代文学の研究者だけでなく、日頃交流する機会の少ない古典文学の研究者とも文学研究をめぐってじっくり討議する機会がもてて勉強になった。中でも『御伽草子』の研究家としても著名なパリ大学教授のジャクリーヌ・ピジョーさんの「日本人が日本的と考えていることが、実は他の国にもある場合が多い」という言葉が心に残った。「日本的」という固定観念が、逆に日本人の研究の視野を狭くしているのではないか、と。これは古典文学に限らず、近代文学の研究においても自戒しなければならない点だろう。